

## ホラティウスとトロイア神話圏

### —『カルミナ』を中心に—

穴見恭子

#### I. はじめに

ホラティウスは『カルミナ』の中で、アルカイオス（前 620 頃-前 580 頃）やサッポー（前 610 頃-前 580 頃）などギリシアの初期の抒情詩人たち、およびアスクレピアデス（前 3 世紀）のようなヘレニズム期の詩人が用いた抒情詩的な韻律をラテン語の詩に導入しようと努め、自分がローマで初めてこれを為したということにたいへん誇りを持っていた<sup>1</sup>。

抒情詩的な韻律を「小さな調べ」と呼んで、それにこだわるホラティウスは、内容も抒情詩にふさわしいもの、たとえば恋と酒、友情のような主題をうたいたいとしばしば語っている。そして本来叙事詩でうたわれるような、政治や戦に関する内容を「大いなること」と呼び、抒情詩的な韻律にふさわしくないものとして、なるべくうたいたくないという姿勢を示している。

それにもかかわらず、『カルミナ』の中には叙事詩の最高傑作たるホメロスをふまえている箇所や、トロイア神話圏に関する言及が数多くあらわれる。さらにこの詩集は、内乱を批判しアウグストゥスと新しい体制を称揚する、政治的な内容を扱った詩をも多く含んでいる。ローマの建国神話はトロイア伝説に結びつくため、特にこうした政治的な詩の中でトロイア神話を扱うとき、そこにはしばしば政治的な意味が生じる。「大いなること」をうたいたくないはずのホラティウスが、敢えてホメロスやトロイア神話圏に属するエピソードに言及するとき、詩人はそこにどのような意味を込めていたのであろうか。

特に、前 23 年に出版された『カルミナ』第一巻から第三巻には、矛盾したふたつの態度、つまりトロイア神話を「大いなること」の象徴として語りたくないとする態度と、これを以てローマの起源やアウグストゥスの栄光を語ろうとする態度が同時に認められる。それに対して、前 13 年に出版された第四巻では、ホラティウスは前

---

<sup>1</sup> 『カルミナ』のテキストは D. R. Shackleton Bailey (hrsg.), *Q. Horati Flacci opera*, Stuttgart (Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana), 1985. を用いる。なお、本文中の引用の日本語訳は執筆者の試訳による。

19年に一応の完成をみた『アエネイス』を念頭に置き、ローマとアウグストゥスを礼讃することに徹している。「大いなること」を退けようとする姿勢はもはや見られなくなる。

本稿では、『カルミナ』におけるトロイア神話への言及に注目し、モチーフごとの扱われ方の違いを考察する。「大いなること」を語りたくないとしながらも政治的な事柄を扱うという、一見矛盾のある自らのふたつの姿勢に、ホラティウスがどのように折り合いをつけていたのか、そしてその態度がどのように変化していったのかを明らかにしたい。

## II. ホラティウスと抒情詩

ホラティウスがトロイア神話についてどのように言及しているかを考察する前に、まずホラティウスが抒情詩的な韻律に非常にこだわったのは何故かを確認しておきたい。

ホラティウスは抒情詩的な韻律を「琴の調べ *citharae modi*」(C.2.12.4) とか「小さな調べ *modi parvi*」(C.3.3.72) などと呼んでおり、『カルミナ』第一巻から第三巻においては恋や酒などの主題をそうした韻律にふさわしい「愉快的なこと *ioci*」(C.2.1.36) として好んでいる。一方、将軍の勲や政治的なことから、本来叙事詩で語られるような内容を「大いなること *grandia* (C.1.6.9), *magna* (C.3.3.72)」と呼んでいる。ホラティウスは『カルミナ』の各所で、抒情詩的な韻律は「かぼそく *tenuis*」「戦嫌い *inbellis*」で「軽く *levis*」「やわらかい *mollis*」ものであって、「大いなる」内容には似つかわしくないものであると語り、「大いなること」をうたいたくないという姿勢を示している。

それは何故であったのか。ホラティウスは、「これまで他人の口で語られたことのないもの *adhuc indictum ore alio*」(C.3.25.7-8) をうたいたいと『カルミナ』の中で繰り返し語る。キケローは『弁論家』の中で「ギリシア人たちによって琴の詩人たち *λυρικοί* と名付けられる人たち *qui λυρικοί a Graecis nominantur*」(Cic.Or.55.183) と記述しているが、これは当時ローマではいまだ、ラテン語で「琴の詩人たち *lyrici vates*」(C.1.1.35) と呼ぶべき抒情詩人の存在が一般的でなかったことを示す。

『カルミナ』を執筆した際のホラティウスの望みは、ラテン語の詩に初めてこれら

の「アイオリスの琴弦 *Aeoliae fides*」を導入した者として、サッポーやアルカイオスに並び称されることであった。たとえば、最初の詩であるところの第一巻第一歌の中で、

*quod si me lyricis vatibus inseres*

*sublimi feriam sidera vertice. (C.35-36)*

「もしあなたがわたしを琴の詩人たちに加えて下さるのであれば、わたしは頭を高くして星辰を打つであろう。」

とうたい、この詩集をもって「琴の詩人たち *lyrici vates*」すなわちギリシアの抒情詩人たちの数に加わりたいという強い希望を表明している。彼らが用いた抒情詩的な韻律をラテン語の詩に初めて導入することによって、ラテン詩における抒情詩という新たなジャンルをうち立てようとしたのである。ローマではまだ広く受け容れられているわけではないこのジャンルを確立させるために、最初はできるだけ内容も韻律にふさわしいものをうたいたいと考え、「大いなること」を遠ざけたのであろう。

ホラティウスが「大いなること」をうたうまいとしたもうひとつの理由として、戦への嫌悪が挙げられる。彼はアテナイのアカデメイアに遊学中、他の学生たちとともに共和主義に共鳴した。前 43 年にローマから逃れてきたブルトゥスの幕僚となり、前 42 年のフィリピの戦いに軍司令官として参加、アントニウスとオクタウィアヌスを相手どって戦うことになる (*Epist.2.2.45ff., Serm.1.6.48, C.2.7.9ff*)。大敗北を喫し、命からがら戦場を逃れてローマに戻るが、退役軍人への土地配分のために父の財産を没収される (*Epist.2.2.4ff.*)。

自らも戦場に行き、戦による苦難を経験した彼は、詩の中でまで戦を語りたくはなかったようである。ホラティウスが詩の中で内乱について言及するとき、彼はその過去の歴史を厳しく弾劾している (e.g. *C.1.2, 1.35, 3.6, 3.24*)。ホラティウスが「大いなること」をうたいたがらなかったことには、彼のこうした個人的な経験も影響を与えていると考えられる。

抒情詩的なものに対するこだわりや、戦への嫌悪の念を抱き続けながらも、ホラティウスはトロイア神話に言及し政治的な題材を扱う。その矛盾に彼はどのように折り合いをつけ、どのように態度を軟化させていくのであろうか。以下に考察していき

い。

### Ⅲ. 『カルミナ』 第一巻から第三巻におけるギリシア神話

#### 1. ギリシア方に属するもの

一口にトロイア神話と言っても、そこに含まれるものはギリシア方の武将たちや、トロイア方に属する者、そして各々の陣営を応援する神々など様々である。これらについてのホラティウスの言及に注目すると、それぞれに別の意味づけが為されており、扱いが異なっていることがわかる。モチーフを使い分けることによって、己の言葉に矛盾が生じないようにしていると言うことができるであろう。ここからは第一巻から第三巻の中で、ホラティウスがホメロスやトロイア神話圏のエピソードについてどのように言及しているかを見ていくことにする。

まず、トロイア神話圏に属するものの中でも、ギリシア方の武将に関する言及に注目し、第一巻第六歌を取り上げたい。この詩は *recusatio* と呼ばれる辞退の詩で、オクタウィアヌスの後継者と目された將軍マルクス・ウィプサニウス・アグリッパ（前 64 頃-前 12）に捧げられたもので、オクタウィアヌスとアグリッパに対する称賛の詩をつくるよう要請された際、そのような役目は自分には荷が勝ちすぎると辞退する内容になっている。

この詩の書き出しで、ホラティウスは自分ではなく、「マイオニアの歌うたう鳥 *Maeonii carminis ales*」(C.1.6.2) であるウァリウスがあなたの栄光を語るにふさわしいであろう、と語る。ここに出るマイオニアとはホメロスの生地と伝えられるリュディアのことで、鳥は詩人を指すのによく使われる比喻である。友人の叙事詩人ウァリウスをホメロスになぞらえ、ホメロスの仕事は自分が果たすべきものではないとホラティウスは語る。

彼はさらに続けて、「屈するを知らぬペレウスの子の激しい腹立ち *gravis Pelidae stomachus cedere nescii*」(C.1.6.5-6) (『イリアス』のこと) も「二枚舌のオデュッセウスの海をわたる旅路 *cursus duplicis per mare Ulixei*」(C.1.6.7) (『オデュッセイア』のこと) もうたう気はないのだと宣言している。ここにおいてホメロスの仕事は叙事詩的なものの象徴としてあらわれており、ホラティウスの拒絶の対象となっている。

そしてメリオネスやテュデウスの子ディオメデスの名を挙げ、彼らについてもふさわしく語る力は自分にはないとしている (C.1.6.13-16)。メリオネスはクレタ王イドメネウスの従者として登場し、ギリシア軍の一員として『イリアス』の中で活躍する。アテネに愛されるディオメデスはアイアスと並んで、ギリシア軍中アキレウスに次ぐ武将であり、アプロディテやアレスを傷つけるほどの力を持つ (II.5.335ff., 855ff.)。彼らの名前もまた、叙事詩的なもの、戦に関することがらの象徴として挙げられている。

以上のように、この第一巻第六歌の中では、『イリアス』『オデュッセイア』について自分は語らないと言っているホラティウスであるが、他の詩 (cf.C.3.3) では、ローマ建国神話に深い関わりを持つトロイア王家の故事をひいて、ローマ市民として相応しい道徳を説いている。これは一見矛盾した態度に見える。

ここで注目すべき点は、この詩においてホラティウスが、それについて語ろうとは思わない、と言いながら叙事詩的な「大いなること」の象徴として名を挙げた人物は、すべてトロイア神話の中でもギリシア方の主だった武将たちであるということである。アキレウス、オデュッセウス、メリオネス、ディオメデスは、みなギリシア方の人物であって、トロイア王家の者についてはここでは言及されていない。戦の象徴としてここで語るまいとしているのはギリシア方の人々であり、ローマの民にとって祖先であるトロイア王家の人々のことについては、語らないとは言っていないのである。よってホラティウスがトロイア方に属するものについて語っても、そこに矛盾は生じないということになる。

それでは、トロイア王家に対してはどのような語り方がなされているのであろうか。次に考察していくことにしたい。

## 2. トロイア王家の罪

ローマの起源がトロイアにあるという説は古くから存在した。前3世紀から2世紀初頭の作家、ナエウィウスとエンニウスは、それぞれの叙事詩『ポエニ戦争』と『年代記』の中でこの説を扱っているし、大カトーもこの伝説を歴史的効用のあるものとしている (*Origines*)。プルタルコスによると、ティトゥス・フラミヌスはデルポイの神殿に「アエネアスの子孫の名において」奉納を行っている (*Vita.Flam.12*)。アウグストゥスの時代には、内乱がようやく収まり、新しく権力を獲得した人々は

それに歴史的な裏づけを与えようとした。その結果、ローマの起源研究が流行を見たようである。ティトゥス・リウィウスの『ローマ建国史』などもその流れの中で刊行された<sup>2</sup>。

ホラティウスも第三卷第三歌において、ローマの起源をトロイアにあるとしている。しかし、彼はラオメドンやプリアモス、パリスといった人々について語る時、必ずしも好意的であるわけではない。むしろ、トロイア王家の者たちが犯した罪、特に信義に反した罪を批判する内容が多く見られる。ここにはどのような意図が込められているのであろうか。第一卷第十五歌、第三卷第三歌について、それぞれ具体的に考察していきたい。

まずは第一卷第十五歌を取り上げる。この詩は

Pastor cum traheret per freta navibus

Idaeis Helenen perfidus hospitam,

ingrato celeris obruit otio

ventos ut caneret fera

Nereus fata: (C.1.15.1-5)

「不実な牛飼い（パリス）が、自分をもてなしたヘレネを、イデ山の舟で海を越えて連れ去ったとき、速い風をありがたくない風でおしつづみ、ネレウスは不吉な宿命をうたった。」

という詩句で始まり、トロイア神話におけるパリスとトロイアの破滅の運命を、海の神ネレウスの予言のかたちでうたうという内容になっている。

「不実なperfidus」「もてなしてくれた人hospita」といった語は、パリスがスパルタにおいてメネラオスの客人としてもてなされながら、その信義に反した罪のことを指す。古代には「外国の人には親切にしなければならない」という倫理観があり、客人をゼウスに護られたものとして歓待し贈り物を取り交わすクセニア（ἑξενία「異人歓待」、「客人厚遇」などと訳される）の風習が存在した。ひとたび宿主と客人になった者同士の間には末代まで変わらぬ友誼が結ばれるのである。主客関係はゼウスの司る神聖

---

<sup>2</sup> 小川正広「古代ローマにおけるアエネアス伝説の意義（上）」（『古代文化』31-1（1979年）所収）2-3頁。

な絆であった。ゆえに、これを侵犯することは神に仇なす行為であるとされていた。ネレウスはこの後、パリスが無惨に戦場に斃れることを予言するが、これは主客の義を破ったことに対する罰である<sup>3</sup>。

さらに、この罰はパリスひとりの上にとどまらない。主客関係を侵犯したクセイノスへの怒りはその共同体全体、トロイアの国民すべてに向けられる。ひとりの犯した罪ゆえに、共同体全体に天罰が下るという現象はしばしば見られることである。トロイアの落城もまた、主客の義を守るゼウスによる神罰なのである。

『カルミナ』第十五歌の最後の部分で、ネレウスは次のようにトロイアの落城を予言する。

iracunda diem proferet Ilio  
matronisque Phrygum classis Achillei;  
post certas hiemes uret Achaicus  
ignis Iliacas domos. (C.1.15.33-36)

「アキレウスの怒れる船団が、イリオンとプリュギアの婦人たちとのためにその日を引き延ばしても、定まった年数ののち、アカイアの炎はイリオンの家々を燃やすだろう」

こうして、主客の義に背いたパリスの罪は、パリスひとり滅ぼすばかりでなく、最終的に「イリオンとプリュギアの婦人たち *Ilios matronaeque Phrygum*」を滅ぼすことになる。「定まった年数ののち *post certas hiemes*」とあるように、すべては神の定めた運命である。

この詩は主客の信頼関係を裏切ったパリスの罪と、それがもたらした悲劇を語ったものであるが、ここにうたわれる、海を隔てた高貴で背徳的な恋人達パリスとヘレネは、アントニウスとクレオパトラの寓意であるとするのが定説となっている<sup>4</sup>。

---

<sup>3</sup> 異人歓待によって生じる不可侵の絆を汚すことは、重大な罪であった。『イリアス』第三歌、第十三歌において、メネラオスはゼウスが主客の義を破ったパリス、ひいては彼が属するトロイア全土に天罰を下すであろうことを予言する。(Il.3.351-3.354, 13.623-627)

<sup>4</sup> cf. R. G. M. Nisbet / M. Hubbard (comm.), *Horace: Odes, book I*, Oxford, 1980, pp.189-190

つまり、この詩にはパリスになぞられられたアントニウスのオクタウィアヌスへの背信を咎める意図が含まれていると言えよう。トロイア王家の人間であるパリスはここではこのように否定的な描かれ方をしている。ホラティウスは、トロイア王家の人間が犯した背信の罪を描くとき、そこに内乱に荒れたかつてのローマを批判する意味を込めているようである。これによって、その状況を打開しローマに平和をもたらしたアウグストゥスを讃える意図があったと思われるが、このような傾向は次に見る第三巻第三歌において一層顕著である。

第三巻の第一歌から第六歌までの一連の歌はいずれも新体制における道徳を説く内容となっており、まとめて「ローマ頌詩」と呼ばれる。この第三巻第三歌は「正しく意志の強靱であること *iustus et tenax propositi*」を説いたもので、『カルミナ』全四巻の中でもっとも長い詩である。

まずこの詩の冒頭では、「正しく意志の強靱であること」という徳性ゆえに、ポルクスやヘラクレスやバックス、そしてクィリヌス（ロムルス）が神となったこと、そしてアウグストゥスも将来その仲間に加わるであろうことが語られる（C.3.3.9-17）。

続いて、以下のように、ユノがローマの建国者ロムルスの神化を許したことが語られる。ロムルスをうたっているが、それは同時にローマの第二の建国者を自認していたアウグストゥスの将来の神化についても語っているとみなすことができる。

さて、その語りの中で、ユノはトロイアの民が犯した罪に言及する。

*'Ilion, Ilion*

*fatalis incestusque iudex*

*et mulier peregrina vertit*

*in pulverem, ex quo destituit deos*

*mercede pacta Laomedon, mihi*

*castaeque damnatum Minervae*

*cum populo et duce fraudulentio.*

*iam nec Lacaenae splendet adulterae*

*famosus hospes nec Priami domus*



periura pugnacis Achivos

Hectoreis opibus refringit

nostrisque ductum seditionibus

bellum resedit. (C.3.3.18-30)

「イリオン，イリオンを，滅びをもたらす不実な審判者と異邦の女とが灰燼に帰さしめた。ラオメドンが約束された報酬について神々を裏切ったときから，その町はわたくしと，貞淑なるミネルウァに引き渡されたのだ，その民と不実な将と共に。

いまやラケダイモンの姦婦の目に悪名高き客人が輝くこともなく，プリアモスの偽誓の家も，ヘクトルの助けによって戦好きのアカイア人を阻むこともなく，我々の不和によって導かれた戦も静まった。」

「滅びをもたらす不実な審判者 *fatalis incestusque iudex*」はパリスのことであり，金の林檎を以てユノとミネルウァとウェヌスの美を審判した際，美女を与えようという約束に応じてアプロディテを選び，ユノの威信を傷つけたことを指す。「異邦の女 *mulier peregrina*」はヘレネである。

トロイアを「灰燼に帰さしめた *vertere in pulverem*」のは，「悪名高き客人 *famosus hospes*」パリスの，メネラオスとの主客の義を汚した罪であるということは，先に見たとおりである。しかし，さらにそれ以前に，トロイアの運命はユノとミネルウァに「引き渡された *damnatus*」のだという。

ここではパリスよりも，ラオメドンに特に注意が向けられている。かつてトロイア王ラオメドンはアポロンとポセイドンにトロイアの城壁を築いてもらいながらその返礼をしなかったため，二神の怒りを買った。神に対する背信の罪が，そもそもの発端であるとされているのである。「その民と不実な将と共に *cum populo et duce fraudulentio*」とあるように，ここでもやはり，個人の罪の肅正が共同体全体に降りかかっている。ラオメドンの罪ゆえに，プリアモスの一族は「偽誓の *periura*」民とされ，その罪を背負うことになる。

さらにここで特記すべきこととして，ウェルギリウスが『農耕詩』において，ラオ

メドンの罪をローマの民の罪としており、罪人たちの救い手としてのアウグストゥスに言及している。

di patrii Indigetes et Romule Vestae mater,  
quae Tuscum Tiberim et Romana Palatia servas,  
hunc saltem everso invenem succurrere saeclo  
ne prohibete. Satis iam pridem sanguine nostro  
Laomedontae luimus periuria Troiae;  
iam pridem nobis caeli te regia, Caesar,  
invidet atque hominum queritur curare triumphos. (G.1.498-504)

「祖国の神々、インディゲス神たちよ、ロムルスよ、母なるウェスタ、エトルリアのティベリス河とローマのパラティウムの丘を護りたもう方よ、せめてはこの若者が混乱の時代を救うのを妨げたもうな。十分に、すでに長いこと、我らの血を以て、トロイアのラオメドンの背信の罪を我らは償った。すでに長いこと、天の宮殿は、カエサルよ、あなたのために我らを羨み、あなたが人間たちの勝利を気にかけることを嘆いている。」

ウェルギリウスもホラティウスと同様に、トロイア王家の人間が神々に背いた罪を、アウグストゥスがあらわれる以前の、内乱に荒れて同胞の血を流したローマの罪と重ね合わせたかたちで描いている。

こうしたトロイア王家の罪にも関わらず、ユノは、ロムルスが神の座に加わることを許し、ローマの繁栄を認める。トロイア王家に象徴される内乱の時代のローマと、ロムルスに象徴されるアウグストゥスの新しいローマは、別のものとして扱われる。古来ユノは、トロイアとローマに敵対してきた。それがロムルスの、ひいてはアウグストゥスの神化を許し、ローマの繁栄を認めたことで、アウグストゥスの威光はいつそう高められることになる。

ただしそこには「長大な海が、イリオスとローマの間で荒れ狂う限り *dum longus inter saeviat Ilion Romamque pontus*」(C.3.3.37-8)「プリアモスとパリスの塚の上にて家畜が駆け回り、野性の獣が子らを恐れずに隠す間は *dum Priami Paridisque busto insultet armentum et catulos ferae celent inultae*」(C.3.3.40-42)という条件がつく。

つまり、イリオスとローマは遠く隔てられていなければならない、トロイアの地は荒れるがままにされていなければならない。

ラオメドンに始まるトロイアの罪がローマの過去の内乱の罪と重ねあわされるとするならば、ロムルスすなわちアウグストゥスの栄光によって罪が許された今、ふたたび過去の罪を繰り返してはならない。この詩はそのことをうたっている。

次の箇所にはトロイアの再興を禁じる旨がよりはっきりと書かれる。

sed bellicosis fata Quiritibus  
hac lege dico, ne nimium pii  
rebusque fidentes avitae  
tecta velint reparare Troiae.

Troiae renascens alite lugubri  
fortuna tristi clade iterabitur,  
ducente victrices catervas  
coniuge me Iouis et sorore.

ter si resurgat murus aeneus  
auctore Phoebo, ter pereat meis  
excisus Argivis, ter uxor  
capta virum puerosque ploret.' (C.3.3.57-68)

「しかるに、戦好きのクイリヌスの民に、わたしはこの条件のもと宿命を語ろう。あまり忠心が過ぎたり、また力を過信したりして、父祖のトロイアの屋根を再興することを望まないように。トロイアの運命が悲嘆の前兆をもって再生し、悲しきわざわいを繰り返すことになろう。ユピテルの妻にして姉妹であるわたしが勝利の軍をみちびく。もし三度、青銅の城壁がポイボスを建設者としてよみがえっても、我がアルゴス兵たちによって打たれて三度滅び、三度、捕らわれの妻たちが亡き夫と子供たちを悼むであろう」

このように、ユノはかつてのトロイアを棄てるように説いている。これはすなわち内乱の罪を犯した古いローマを棄てよということであろう。

以上のように、ホラティウスはローマの祖先たるトロイア王家について言及する際、パリスやラオメドンが犯した背信の罪と、アウグストゥス以前の古いローマにおける内乱の罪とを重ね合わせている。ホラティウスのトロイア王家の人々についての言及は好意的なものではなく、トロイア王家は除かれるべき過去を象徴する存在として描かれている。それを弾劾することによって、ロムルスとアウグストゥスの新しいローマと対比させ、アウグストゥスの栄光を讃えているのである。

### 3. アウグストゥス讃歌におけるトロイア方の神々

ローマの起源であるトロイア王家の人間は、言及自体を拒まれてはいないが、内乱時代のローマ、過去のローマの象徴として否定的に描かれていた。そうすると、トロイアの血を引くローマを讃えるためにトロイアの威光を用いるということはできなくなるように思われるが、ホラティウスは罪人たるトロイア王家の人間でなく、トロイアに味方した神々に言及することでこの点を解決している。

ホラティウスは第一巻第二歌の中で、アウグストゥスを神々が若者の姿をとってこの世にあらわれたものとして描いている。そこでローマとゆかりの深い神々に次々に呼びかけるのであるが、これらの神々は皆、トロイア戦争においてトロイア方に味方した神々でもある。そして、これらの神々にはホメロスのエピテトンが冠されている。ホラティウスはトロイア方の神々を讃えることによって、その祝福の下で新たなローマを築いたアウグストゥスを称賛している。

第一巻第二歌では、その詩の前半において、ローマが「市民が武器を研いだこと *civis acuisse ferrum*」(C.1.2.21), 「父母の過ちゆえの戦のこと *pugnae vitio parentum*」(C.1.2.23), すなわち、第三巻第三歌においてトロイアの背信の罪と同一視されていたこの内乱の罪ゆえに、ユピテルによってローマに雷が落とされ、洪水にウエスタが沈みゆく様を描いて嘆く (C.1.2.1-24)。そして「人々は神々のうちの誰を呼ぶのだろうか、ほろびゆく権力の運命のために? *Quem vocet divum populus ruentis imperi rebus?*」(C.1.2.25-26) とうたい、恐ろしい罰からローマを救ってくれる神々と、内乱の罪をあがなうべきアウグストゥスの存在を示唆する。その上で、ホラティウスはローマの守り手である神々に、ひとりずつ呼びかける。

まずは、「輝く双肩を雲に包まれた *nube candentis umeros amictus*」(C.1.2.31) 予言の神アポロが登場する。

アポロは歴史的に、アウグストゥスやカエサルを輩出したユリウス氏族とゆかりの深い神であった。ユリウス氏族は古来、アポロと同一視されるウェディオウイスに犠牲を捧げており、リウィウスによると、早くも前431年に、グナエウス・ユリウスはアポロ神殿を奉納しているという (Liv.4.19.7)。アクティウムの戦勝ののちには、オクタウィアヌスがアクティウムとレウカスにアポロ神殿を奉納している。スエトニウスによると、アウグストゥスは尊敬の念から「アポロの子」と呼ばれ、その信仰はアウグストゥスの生前から東方において盛んであったという (Suet. Aug.94.4, Dio 45.1.2)<sup>5</sup>。

したがって、アポロはここでローマの救い手として讃えられるにふさわしい神である。アポロを讃えることは、その化身とされたアウグストゥスをも讃えることに繋がる。

さらに、アポロンはトロイア戦争において、ローマの起源たるトロイアを常に味方した神であり、ホラティウスはこの詩句において、そのことも念頭に置いていると思われる。ここにあらわれる「輝く双肩を雲に包まれた」という表現は『イリアス』の、ポイボス・アポロンはヘクトルの前を「双肩に雲をまとって εἰμένος ὤμουσιν νεφέλην」(Il.15.308) 歩んだ、という表現を念頭に置いたものであろう。

続いて現れるのは、「うち微笑むエリュクスの御方 Erycina ridens (ウェヌス)」(C.1.2.33) である。

エリュクス山はシキリアの西海岸にある2500フィートの山であり、山頂は古くからウェヌスの聖地とされている。後代の歴史家ディオニュシオス・ハルカリナッソスによるとこの女神は「アプロディテ・アイネイアス」と呼ばれたという (R.A.1.50.4, 1.53.1)。

アプロディテすなわちウェヌスの子であるトロイアの英雄アエネアスがローマの建国の祖であるとする伝承は古くから存在した。特に、ユリウス氏族は自分たちの名をアエネアスの息子にしてウェヌスの孫であるユールスと結びつけており、ウェヌス・ゲネトリクスは、前125年にセクストゥス・ユリウス・カエサルによって、前94年頃にはロキウス・ユリウス・カエサルによって、コインの柄に用いられたという。また、スエトニウスによれば、ガイウス・ユリウス・カエサルは前68年に伯母ユリ

---

<sup>5</sup> cf. R. G. M. Nisbet / M. Hubbard, *Op.cit.* p.30

アの追悼演説において「ユリウス家はウェヌスの血統をひく」と語ったという (Suet. *Div. Iul.* 6.2) <sup>6</sup>。したがって、ここでウェヌスを讃えることは、その末裔たるアウグストゥスを讃えることに繋がる。

『イリアス』において、アプロディテは息子アイネイアスを援け、パリスを援け、つねにトロイア方を庇護する女神である。ここにあらわれる「うち微笑む *ridens*」という表現は、ホメロスのエピテトン「笑み愛でる *φιλομμειδής*」(II.3.424) を引いたものであろう。

続いてマルスが登場する (C.1.2.35-40)。ロムルス之父であるマルスもまた、ローマの「創造者 *auctor*」として、ここで助けを求められる。マルスも歴史的にユリウス家と深い関わりがあり、時にコインの柄とされている。2世紀に建設されているマルス・ウルトルの神殿には、ウェヌス・ゲネトリクス、マルス・ウルトル、ディウス・ユリウスの像があったという。よって、やはりマルスを讃えることはアウグストゥスを讃えることに繋がる。

アレスもまた、トロイア戦争においてはトロイア方に味方している。ここで、マルスは「あまりの長き遊びに飽きた方 *nimis longo satiate ludo*」と呼びかけられているが、ホメロスにおいても「戦に飽かぬ *ἄτος πολέμοιο*」(II.5.388) というエピテトンが冠されるように、アレスは通常血に飽きるということはない。それが戦に「飽きる *satiatus*」というのは、戦が終わり、平和な時代が来たことを強調するための表現である。

そして、最後にメルクリウスが登場する。

*sive mutata iuvenem figura*

*ales in terris imitaris, almae*

*filius Maiaie, patiens vocari*

*Caesaris ultor.* (C.1.2.41-44)

「あるいは姿を変え、若者を模して地上に顕れた翼ある方、恵み豊かなるマイアの翼ある息子よ、カエサルの復讐者と呼ばれることを受け入れて下さるならば」

---

<sup>6</sup> cf. R. G. M. Nisbet / M. Hubbard *Ibid.* p.32

ここで、ホラティウスはメルクリウスがこの世にアウグストゥスの姿で顕現したのだとして、この神を讃えながら間接的にアウグストゥスを讃えている。

メルクリウスは、ここでは特にホメロスのエピテトンを冠されてはいない。神々の使者である彼は、トロイア戦争においても特に自らの意志でいずれかに味方するということはないが、『イリアス』第二十四巻においてはゼウスの命により、老プリアモスがアキレウスからヘクトルの亡骸をあがなうため敵陣を訪ねるのに付き添っている。このエピソードについてはホラティウスも、第一巻第十歌で

quin et Atridas duce te superbos

Ilio dives Priamus relicto

Thessalosque ignis et iniqua Troiae

castra fefellit. (C.1.10.13-16)

「というのもあなた（メルクリウス）を導き手として、富もつプリアモスはイリオスをあとにしたとき、おごれるアトレウスの子らをも、テッサリアの篝火をも、トロイアに敵対する陣をも、だましおおせたのですから」

と言及している。

以上のように、ホラティウスはホメロスのエピテトンを用いながら、トロイア方に味方した神々すなわちローマの守護神たる神々を礼讃する。そして、古きローマの内乱の罪をあがなうべき人として、これらの神々にゆかりの深いアウグストゥスを間接的に讃えている。ここではトロイア神話的な要素が、アウグストゥスによって興った新たなローマを祝福するために用いられている。

ここまで、ホラティウスが『カルミナ』第一巻から第三巻において、トロイア神話圏に属するさまざまなものをどのように扱っているかを考察してきた。ギリシア方に属する武将は、叙事詩的なものの象徴として扱われ、辞退の詩の中で遠ざけられていた。トロイア方に属するものについては詩の中で語らないとは言っていないが、ラオメドンやパリスといったトロイア王家の人々は、彼らの神に対する背信の罪ゆえに、過去のローマの内乱の罪の象徴として描かれ、戒めるべき過去として言及されている。ローマとその新たな統治者アウグストゥスを讃えるためには、ホメロスのエピテトン

をもって、トロイア方に味方した神々が用いられていた。

ギリシア方に属するもの、トロイア王家の人間、トロイアに味方した神々、それぞれに対するホラティウスの態度は一貫している。彼は文脈に応じて、最もその場にふさわしいものに言及している。こうして彼は矛盾なく、叙事詩的な「大いなるもの」、語りたくないものとしてトロイア神話に言及しながら、トロイア王家のエピソードを用いてローマの体制についてうたうことに成功している。

#### IV. 『カルミナ』第四卷におけるギリシア神話

##### 1. 世紀祭とホメロスの仕事の肯定

前 13 年に出版された『カルミナ』第四卷の時点では、ホラティウスはかつて「大いなること」の象徴として遠ざけたホメロスの仕事を全面的に肯定しており、抒情詩的な韻律に政治的なこと、「大いなること」は合わないとしてこれを退けるような姿勢はまったく見られなくなっている。第四卷は、第一卷から第三卷までとは出版年代に開きがあり、作風も、作者を取り巻く事情も大きく異なっている。抒情詩的なものへのこだわりから生じた「大いなるもの」への葛藤、戦にまつわることがらをうたいたくないとする気持ちに変化が生じたことがうかがえる。

この間の大きな出来事として、前 19 年にウェルギリウスが他界し、『アエネイス』が一応の完成をみたことが挙げられる。この作品は完成前から、プロペルティウスによって「何かイリアスよりも偉大なものが生まれようとしている」(2.34)とうたわれ、ローマの起源をうたった一大叙事詩として人々の期待を一身に受けていた。ウェヌスの息子であるトロイアの英雄アエネアスが、父アンキセスと共に祖国を逃れ、苦難の末にイタリアに王国を築くまでを描いたこの叙事詩は、ローマの建国神話を確立したものとして、アウグストゥス始めローマの民に非常に重んじられた。

第一卷から第三卷においては、ホラティウスがトロイア神話圏に言及するとき、その典拠の多くはホメロスであったが、第四卷になると、当然のことながら、ホメロス以上に『アエネイス』からの多大な影響が窺えるようになる。

そして、もうひとつ重要なことは、ローマ最高の詩人とみなされていたウェルギリウスの死後、文壇の長老となっていたホラティウスが、世紀祭でうたうための讃歌の制作を依頼されたことである。世紀祭というのは新世紀の始まりを祝うために百年に一度開かれる祝祭である。本来はヴァレリウス氏族が行っていた祭儀であり、前 249



年に開催されたものが記録に残る最古のものである。前2世紀には前146年に開かれているが、前40年代は内乱のために催されなかった。アウグストゥスは平和の到来を記念してこれを復活させたのである<sup>7</sup>。宗教儀式というよりはむしろ、ローマの繁栄を内外に喧伝するためのものであり、またローマの支配者としてのアウグストゥスの存在を広く世に知らしめるためのものであった。

世紀祭は前17年5月末日から三日にわたって開かれた。讃歌というのは、祭りの三日目に、正式な結婚から生まれ、両親が健在の少年少女、それぞれ二十七名により、パラティウムの丘のアポロ神殿において歌われたものである。

この依頼はすなわち、ウェルギリウス亡き今、ホラティウスがローマ最大の詩人であると公に認められていたことを意味する。ウェルギリウスの後を引き継いで、ホラティウスがローマの栄光をうたうことになるのである。そのことについて、ホラティウスは第四巻第三歌の中で次のように誇っている。

sed quae Tibur aquae fertile praefluunt  
et spissae nemorum comae  
fingent Aeolio carmine nobilem.

Romae principis urbium  
dignatur suboles inter amabilis  
uatum ponere me choros,  
et iam dente minus mordeor invido. (C.4.3.10-16)

「しかるに肥沃なティブルを流れる水が、森の濃い群葉が、アイオリスの詩をもってわたしを有名にするであろう。諸都市の君主たるローマの民は、詩人たちの愛すべき合唱隊にわたしを数え入れることを認め、今やわたしは妬みの歯によって噛まれることがない」

totum muneris hoc tui est,  
quod monstror digito praetereuntium

---

<sup>7</sup> もとは冥界の神ディスとプロセルピナに対して行なう祭儀であったが、アウグストゥスはこれをアポロとディアナを祭るものに変えたという。

Romanae fidicen lyrae: (C.4.3.21-23)

「これはすべてあなたの贈り物、わたしが通りゆく人々からローマの琴の詩人だと指さされるのは」

ホラティウスが、自分が初めてラテン語の詩に導入した「アイオリスの詩をもって *Aeolio carmine*」，ローマにおける最初の抒情詩人として永遠に世に残ることを渴望していたことは、最初に述べたとおりである。まだローマに知られていないギリシアの抒情詩的な韻律をもってローマに独自の詩を確立することは、第一巻から第三巻の時点ではまだ希望であった。しかし数年を経て、ホラティウスの詩はローマの民に受け入れられ、ホラティウスは都市の栄光を語るにふさわしい「ローマの琴の詩人 *Romanae fidicen lyrae*」として認められるようになっていたのである。

ここにはもはや、抒情詩的な韻律に、政治的なこと、「大いなること」は合わないとしてこれを退けるような姿勢はまったく見られなくなっている。ホラティウスは彼がローマにうち立てた抒情詩的な韻律で、ローマの繁栄を讃えている。

第四巻第九歌の中で、彼は抒情詩にも叙事詩と同じ仕事をするのが可能であると語っている。この詩はアウグストゥスの寵臣マルクス・ロリウスに捧げられたこの詩は、詩の永遠性をうたいあげたものである。

Ne forte credas interitura quae  
longe sonantem natus ad Aufidum  
non ante vulgatas per artis  
verba loquor socianda chordis:

non, si priores Maeonius tenet  
sedes Homerus, Pindaricae latent  
Caeque et Alcaei minaces  
Stesichorive graves Camenae;

nec si quid olim lusit Anacreon,  
delevit aetas; spirat adhuc amor  
vivuntque commissi calores

Aeoliae fidibus puellae. (C.4.9.1-12)

「滅びるとは決して思うな、とおく音響くアウフィドゥスの河畔に生まれ、かつて大衆に知られたことのない技を以て琴弦にあわせてわたしが語る言葉が。マイオニアのホメロスが第一の座を占めるとしても、ピンダロスの、またケオスの人（シモニデス）の、身に迫るアルカイオスの、莊重なるステシロコスの樂女神たちが隠れるわけではない。また、昔、アナクレオンが戯れにうたったことを時は消し去らなかつた。今なお恋は息づき、アイオリスの乙女（サッポー）によって琴弦に託された情熱は生きている。」

「かつて大衆に知られたことのない技をもって *non ante vulgates per artis*」, ホラティウスはまだ誰もラテン語の詩に移したことのないギリシアの抒情詩的な韻律（ここでは琴弦 *chordae*, *fides*）をこのように呼ぶことを好んだ。ホラティウスは自らの詩が不滅のものであるとし、「滅びるとは決して思うな *Ne forte credas interitura*」と訴えた上で、ギリシアの偉大な詩人たちを列挙する。

ホメロスを筆頭として、その他に名前が挙げられるのは、ピンダロス、シモニデス、アルカイオス、ステシコロス、アナクレオン、サッポーといった、第一巻第一歌において彼がその仲間に加わりた望んでいた「琴の詩人たち *lyrici vates*」 (C.1.1.35) である。ホメロスのうたった叙事詩が第一の座を占めるものであるとしても、彼ら抒情詩人たちが戯れにうたったことは、「隠れるわけではない *non latent*」。それを「時は消し去らなかつた *nec delevit aetas*」し、かれらの詩は「今なお息づき *spirat adhuc*」, 「生きている *vivunt*」のである。

詩にうたったことがらを人の記憶にとどめ、永遠に残す力を持っているという点では、ホラティウスも、叙事詩人たるホメロスも、「琴の詩人たち」も同様だと彼は語っている。

ホメロスがうたった「大いなること」も、「琴の詩人」が「戯れにうたったこと *quid lusit*」も、詩人によって語られ、いつまでも世に残るという点においては等しい。

そして、次の詩句において、ホラティウスは第一巻第六歌では自分ほうとうまいと退けていたホメロスの仕事に言及し、その功績を讃えている。

*non sola comptos arsit adulteri  
crines et aurum vestibus inlitum*

mirata regalisque cultus  
et comites Helene Lacaena,

primusve Teucer tela Cydonio  
direxit arcu; non semel Ilios  
vexata; non pugnavit ingens  
Idomeneus Sthenelusue solus

dicenda Musis proelia; non ferox  
Hector vel acer Deiphobus gravis  
exceptit ictus pro pudicis  
coniugibus puerisque primus.

vixere fortes ante Agamemnona  
multi; sed omnes inlacrimabiles  
urgentur ignotique longa  
nocte, carent quia vate sacro. (C.4.9.13-28)

「姦夫のくしけずられた髪，衣服を覆う金，王者の身なりとお供の人々に驚嘆して恋い焦がれたのはラコニアのヘレネだけではない。テウクロスが初めてキュドニアの弓で矢を射たわけでもない。イリオスが荒らされたのはただ一度ではなく，大いなるイドメネウスやステネロスだけがムーサらによって語られるべき戦いを戦ったのでもない。勇敢なるヘクトル，また荒々しいデイポボスが貞淑な妻や子供たちのために初めて重い打撃を受けたわけでもない。アガメムノンの前にも強き者たちは数多く生きた。しかるにすべての者は嘆かれることもなく，長い夜のうちに押しやられ知られざるままなのだ，聖なる詩人を欠くがゆえに。」

パリに焦がれたヘレネも，弓の名手テウクロスも，滅ぼされたイリオスの都も，イドメネウスやステネロスといったギリシア方の武将たちも，敗れて死んだヘクトル，デイポボスなどのトロイア方の武将たちも，ホメロスが描いたからこそ後の世に残ったのであると，ホラティウスは語る。ここではギリシアの人もトロイア王家の人も区別なく並列に並べられている。そして，優れたものは他に多くあってもその大半が「聖

なる詩人を欠くがゆえに *caerent quia vate sacro*」知られざるままに終わるのだとして、ホラティウスはうたったものを永遠にする詩の力が、いかに優れたものであるかを訴えている。

これらのことを語った直後、彼は以下の詩句を以て自分がこれから果たすべき仕事に言及する。

non ego te meis  
chartis inornatum silebo  
totve tuos patiar labores

impune, Lolli, carpere lividas  
obliviones. (C.4.9.30-34)

「わたしはあなたを詩文によって飾らず沈黙を守ったり、これほどのあなたの働きが、ロリウスよ、むざむざ妬み深い忘却に摘み取られるのに耐えたりはするまい。」

とうたい、ロリウスに、あなたの栄光は自分がうたって後の世に残してさしあげるから安心するようにと語るのである。

ここで注目したいのは、ホラティウスはホメロスの詩と自らがこれからうたう詩を同じ次元に置いているという点である。先に引用した箇所において、ホラティウスは『イリアス』にあらわれる英雄たちの名を次々に挙げ、それらを人の記憶に留めたホメロスの力を、極めて価値あるものとして認めた。それからすぐに続けて、だから自分がこれから果たす仕事も、ロリウスのことを人の記憶に留める力を持つ、価値あるものなのだと語る。それはホメロスが果たしたのと同じ仕事である。第一巻第六歌においては、ホメロスを「大いなること」の象徴として遠ざけたホラティウスであるが、ここではその仕事を全面的に肯定し、さらには自分がホメロスと同じ仕事をするものだと語っているのである。

この詩においては、「大いなること」を遠ざけ「愉快的なこと」を称揚するといった、抒情詩にふさわしい主題へのこだわりは、もはや見られなくなっている。語られたものを不滅にする力を持つという点においては、叙事詩も抒情詩も同じであるという認識に、ホラティウスは到達している。

「アイオリアの歌をイタリアの調べに導くこと」を自らの仕事としようとしていたホラティウスは、かつてはまだ新しいこのジャンルの確立に心を砕くため、抒情詩的な韻律にふさわしい抒情詩的な主題に殊更こだわったのであった。しかしいまや、ホラティウスは「ローマの琴の詩人 *Romanae fidicen lyrae*」と認められ、抒情詩的な韻律も確固たるものとなった。そのことが、叙事詩も抒情詩も同じ力を持っていることを認められるだけの心のゆとりを生んだのかもしれない。ここに至って、「大いなること」に関する葛藤は一応の解決を見たと考えてよいであろう。

こうして、ホラティウスは「ローマの琴の詩人 *Romanae fidicen lyrae*」として、トロイア戦争の物語を永遠に記憶に留めたホメロスのように、ローマの栄光を永遠に語りつぐための詩を書くことになる。いわばホメロスの仕事を肯定し、それを引き受けることにするのである。ホメロスが叙事詩によって行ったことを、ホラティウスは抒情詩的な韻律をもって果たすことを自らに課したのである。

## 2. 平和の到来

ホラティウスは第一巻第六歌、第二巻第十二歌などで、「大いなること」はうたいたくないと思いついて退け続けてきた。そしてその理由は、抒情詩に対するこだわりと、もうひとつ、戦場において苦難を経験した彼自身の、戦への嫌悪の念にあった。

抒情詩的な内容に対するこだわりは、先に見た第四巻第九歌の時点で、叙事詩にも抒情詩にも等しく人の記憶にもものごとをとどめる力があることを確信し、抒情詩的な韻律をもって将来まで語り継がれる事柄をうたおうと決断したことによって結末を迎えていた。

それではホラティウス自身の戦への嫌悪の念はどうなったのであろうか。それは、ホラティウスの中から消え去るわけではないが、アウグストゥスが平和を回復させ、もはや戦のことを語る必要がなくなったことによって解決を見るのである。以下に、第四巻第十五歌の内容を詳しく見ていきたい。この歌の書き出しは次のようである。

Phoebus volentem proelia me loqui  
victas et urbes increpuit lyra,  
ne parva Tyrrhenum per aequor  
vela darem. (C.4.15.1-4)

「ポイボスは、戦と敗れた街々のことを語りたいたいと思っていたわたしを、琴でもってお叱りになった。テュレニアの海に小さき帆をかかげるのはやめるようにと。」

「戦と敗れた街々のことを語りたいたいと思っていた」、というのは無論本心ではなく、それを語らなくてもよくなったことを強調するためのポーズである。「小さき帆 *parva vela*」とは「小さな調べ」、抒情詩的な韻律のことである。「テュレニアの海 *Tyrrhenum aequor*」は「大いなること」の比喻であって、やはり「小さな調べ」は「大いなること」をうたうに適さないとしているのである。抒情詩の守護者であるアポロが、「琴でもってお叱りになった *increpuit lyra*」というのは「琴 *lyra*」つまり抒情詩的な韻律を示してそのことを思い起こさせたということである。このあとに語られる、戦のことを語らなくてもよくなったという事実を引き立てるため、ホラティウスはかつて幾度も繰り返した、戦のことをうたうまいとする自らのこだわりを、もう一度言及している。

次に、ホラティウスはアウグストゥスが平和の回復者として果たした仕事を列挙してみせる。

tua, Caesar, aetas

fruges et agris rettulit uberes

et signa nostro restituit Iovi

derepta Parthorum superbis

postibus et vacuum duellis

Ianum Quirini clausit et ordinem

rectum evaganti frena licentiae

iniecit emovitque culpas

et veteres revocavit artis,

per quas Latinum nomen et Italiae

crevere vires fama que et imperi

porrecta maiestas ad ortus

solis ab Hesperio cubili.

custode rerum Caesare non furor  
civilis aut vis exiget otium,  
non ira, quae procudit ensis  
et miseras inimicat urbes.

Non qui profundum Danuvium bibunt  
edicta rumpent Iulia, non Getae,  
non Seres infidique Persae,  
non Tanain prope flumen orti; (C.4.15.4-24)

「あなたの治世は、カエサルよ、豊かな実りを田畑に戻し、我々のユピテルのもとにパルティア人の傲慢な柱から軍旗を奪還し、クィリヌスのヤヌスを戦なきままに閉ざし、正しき規から逸脱した放縦に馬勒をつけ、罪を除き、古の美德を呼び戻した。この古き美德によって、ラティウムの名と、イタリアの力と名声はいや増し、国の威信はヘスペリアの太陽の休息所から、その昇る東まで広がったのだ。

カエサルを国の護り手とするかぎり、市民の狂気も力も、閑暇を消尽させることはないだろう。あるいは、剣を鍛えて、諸都市を悲惨にも敵対させる怒りも。深きダヌウィウスの水を飲む者も、ユリウスの掟を破ることはないだろう、ゲタイ人も、セレス人も、不実なるパルティア人も、タナイスの流れの近くに生まれた者たちも」

アウグストゥスはいまや戦功ある将軍ではなく、平和の回復者となった。ホラティウスはもはや戦のことを語る必要がなくなる。彼はその嫌悪するところであった戦を除いてくれた人としてアウグストゥスを称揚する。そして『カルミナ』の最後を飾る以下の詩句をもって、ローマの民に、みなで『アエネイス』の物語を語りつごうと訴える。

nosque et profestis lucibus et sacris  
inter iocosi munera Liberi  
cum prole matronisque nostris  
rite deos prius adprecati



virtute functos more patrum duces

Lydis remixto carmine tibiis

Troiamque et Anchisen et almae

progeniem Veneris canemus. (C.4.15.25-32)

「我々もまた、平日も、祭日も、たのしきリーベルの贈り物をもって、我々の子らや妻たちとともに、まずは慣わし通りに神々に祈り、勲をあげた将軍たちのことを、父祖のならいにより、リュディアの笛をまじえた歌によって、トロイアを、アンキセスを、恵み深きウェヌスの御子のことを、うたい上げよう。」

「トロイアを、アンキセスを、実り多きウェヌスの御子のことを」というのはすなわち『アエネイス』の物語を指す。ホラティウスはローマの民に向かって、妻子とともに、ローマの建国神話を語り、ローマを讃えようと訴える。

「ローマの琴の詩人 *Romanae fidicen lyrae*」たるホラティウスは、自分の詩が滅びることなく、いつまでも残るものであることを知っていた。しかし、彼はその不滅の詩によってひとりでローマを讃えるのではなく、その詩をもって「平日も、祭日も」常に、ローマの子らが自ら、自分たちの起源である『アエネイス』を物語るようにと、未来永劫呼びかけ続けようとしたのである。「父祖のならいを以て *more patrum*」とあるように、彼は今はまだ新しい『アエネイス』を語ることがローマに根付き、それが未来まで続くならいとなることを予言している。

内乱が終息した前 30 年から時を経て、平和は確固たるものとなった。ここにおいて、ホラティウスはもはや、トロイア王家の罪を咎めることはしない。トロイアの罪、ローマの過去の罪が糾弾される時代は終わったのである。「ローマの琴の詩人 *Romanae fidicen lyrae*」となったホラティウスは、ウェルギリウスが遺した『アエネイス』と自らの不滅の詩をもって、ローマの民ひとりひとりの心にローマを讃えようという思いを喚起せしめようとするところに行きついたのである。

#### 参考文献

Th. W. Allen (ed.), *Homeri Opera*, tom.I-IV, Oxford Classical Texts, 1920.

C. E. Bennett (ed./tr.), *Horace: the odes and epodes*, London (Loeb classical library), 1927.

D. Bo (hrsg.), *Lexicon Horatianum*, 2Bde, Hildesheim, 1965/66.

- E. Fraenkel, *Horace*, Oxford, 1957.
- P. Grimal (tr. by A. R. Maxwell-Hyslop), *The Dictionary of Classical Mythology*, Oxford, 1996.
- A. Kiessling / R. Heinze (comm.), *Q. Horatius Flaccus: Oden und Epoden*, Berlin, 1968.
- R. G. M. Nisbet / M. Hubbard (comm.), *Horace: Odes*, book I-II, Oxford, 1978/80.
- R. G. M. Nisbet / N. Rudd (comm.), *Horace: Odes*, book III, Oxford, 1989.
- T. E. Page (comm.), *Q. Horatii Flacci Carminum, Libri IV*, London, 1961.
- M. C. J. Putnam, *Artifices of eternity : Horace's fourth book of Odes*, Ithaca, 1986.
- D. R. Shackleton Bailey (hrsg.), *Q. Horati Flacci opera*, Stuttgart (Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana), 1985.
- H. W. Smyth / H. Lloyd-Jones (edd./trr.), *Aeschylus*, vol.2, London (Loeb classical library), 1971.
- H. P. Syndikus, *Die Lyrik des Horaz*, 2Bde, Darmstadt, 1972.
- F. Storr (ed./tr.), *Sophocles*, vol.2, London (Loeb classical library), 1913.
- C. A. Trypanis (ed./tr.), *Aetia, lambi, lyric poems, Hecale, minor epic and elegiac poems, and other fragments*, London (Loeb classical library), 1975.
- G. Williams (tr./comm.), *The Third Book of Horace's Odes*, Oxford, 1969.
- 小川正広「古代ローマにおけるアエネアス伝説の意義（上）（下）」（『古代文化』31-1, 31-2（1979年）所収）。
- 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』（岩波書店，1979年）。
- 鈴木一郎『ホラティウス 人と作品』（玉川大学出版部，2001年）。
- 永田康昭「recusatioの味方としてのマエケーナース（上）」（『言語文化論集』40号（1995年）所収）。
- 「recusatioの味方としてのマエケーナース（中）」（『言語文化論集』41号（1995年）所収）。
- 「recusatioの味方としてのマエケーナース（下）」（『言語文化論集』42号（1996年）所収）。
- 中山恒夫『詩人ホラティウスとローマの民衆』（内田老鶴圃新社，1976年）。
- 『ローマ恋愛詩人の詩論 カトゥルルスとプロペルティウスを中心に』（東海大学出版会，1995年）。